

## 「若手教師が何にぶつかり、どう歩んでいるか」

秋山 大輔 (明治大学附属中野中学校・高等学校)  
飯塚 和幸 (明治大学附属中野八王子中学校・高等学校)  
宇野 新之介 (文教大学附属中学校・高等学校)  
竹内 康憲 (都立学校)

### 1. はじめに

筆者らは教師として働き出しおよそ5年である。教師になった直後と現在では、各自が抱える悩みが大きく変化している。悩みは、経験と共に変化している。

筆者らは一月に1回のペースで集まり、現場でのできごとを語り、経験の共有をおこなっている。この集りの始まりは、2006年度に大学院文学研究科に開設されていた臨床教育学特論（担当：高野和子文学部教授）で、飯塚、宇野が会うことに始まった。当時、飯塚は文学研究科地理学専攻の博士前期課程1年、宇野は文学研究科日本文学専攻の博士前期課程1年に在籍していた。飯塚、宇野は大学院で学生をしながら、週2～3日ほど、中学校・高等学校で非常勤講師として勤めていた。現場では日々、さまざまなことが発生し、その解決に悩んでいたことから、悩みの共有化を図り、問題解決の糸口をつかむことを目的に集りを始めた。両者は、博士前期課程を修了した2008年度に、専任教諭として歩みだすことになり、同時に秋山、竹内の両名が加わり、以来5名で経験の共有化を図っている。

本稿の目的は、若手がどのような「壁」にぶつかりどう乗り越えたか?、「壁」を乗り越えるときに必要だったものは何か?教師になりたての若手が、教師という仕事を辞めずに続けるために、ベテランの先生に理解してほしいことは何か?という視点で、我々若手がぶつかった共通点を明らかにし、今後、現役学生や教育現場で生かしてもらうためである。

### 2. 悩みの共有と解決

私たちが教職（非常勤講師時代を含む）に就くことができ、はじめに当たった壁はやはり教科の授業の進め方である。教員は言うまでもなく教科の授業ができて教員である。私たちの中には、10年を超える民間企業での社会人経験があるものもいる。民間企業では、先輩の仕事を見たり、その仕事をこなす為に必要な実践的な知識やスキルを身に付けるための学習をしたりする研修や、先輩に付いていろいろなことを学ぶような見習いの期間があった。しかし、教員という職業は、雇用が決まると、授業開始の日程を伝えられ、即、授業を行わなくてはならない。このことは、はじめて教員として教壇に立つとき、多くの教員は、教育実習での経験のみで教壇に立つことになるということである。私たちは、私立の高等学校、中学校、公立の中学校と、校種はそれぞれ異なっていたが、このような状況をそれぞれ同じように経験した。授業展開にしても、導入、展開、まとめ、その意味も

はっきり分からない。題材としている単元で何を一番の目標として焦点を絞ればよいのかもはっきり理解できない。ワークプリントの作成や板書の仕方も自信が持てない。このような授業力に対する不安を払拭するために、自分自身が自信を持てる知識を得るための勉強をし、授業準備に多くの時間を費やした。さらに実践的な授業力を身につけるために、知識の吸収だけでなく、板書の上達を目指して放課後の教室で一人、板書の練習をしたり、自ら、先輩教員にアドバイスをいただきにいたりもした。このような自分なりの努力を続けながらも、その努力が結果に必ずしも結びつくとは限らず、緊張で言葉が詰まるような場面や、自分の思うようになかなか授業が展開できないことも多くあった。しかし、少ないながらも生徒の理解が深まったことを発問の答えや自主的な質問などから確認できる時も徐々に増えてきた。このように生徒の授業を理解してくれたときは、教員になって良かったと心から思うことができた。

教職に就いた当初、もう一つ私たちの前に大きな壁が立ちはだかった。それは生徒指導である。教育実習では、深く生徒の指導を行うことはない。指導教員が参観してしてくれる状況で授業を行うため、授業中であっても、問題が起こった場合は指導教員が生徒指導をサポートしてくれる。しかし、非常勤講師であっても、教職に就き、授業を任されるようになると、当然、受け持つ授業の中での生徒指導は、自分で行わなければならない。非常勤講師は担任を持っていない。したがって、主に自分の担当する授業の中で生徒指導を行う。騒がしい場合にクラスの集中を促すことなどが日常的に行う授業中の生徒指導であるが、このような、全体に対して注意を促す場合だけでなく、例えば、授業中にイヤホンで音楽を聴いていたたり、マンガを読んでいたりする生徒が在籍する場合もある。このような生徒に対してどのように指導するか、私たちは苦悩した。また、生徒はそれぞれ別の個性があり育った環境も違う。したがって、個々の生徒は、こちらが指導した場合の受け止め方も違う。生徒の個性を受け止め、個々に応じた指導を優先するべきか、規律を守って集団で活動する力を養うためにも公平な規律で線引きをして、指導するべきか、とても悩んだ。生徒指導はそのケースも生徒一人ひとりが違うように多様である。したがって、個々に応じベストな指導方法も生徒の数、いや、それ以上ある。このような状況から、生徒指導は個々の生徒にとって自信を持ってベストと言える明確な指導法を見つけることが困難なだけに、今も頭を抱えることも多い。

非常勤講師から正規教員となると、学校などの運営に関わる仕事である校務分掌など、教科の授業以外の仕事を行うことになる。教務部、生活指導部などの部署の数や、仕事を進める方法については、私立学校、公立学校、中学校、高等学校というような校種などによる違いは当然であるが、同じ校種であっても各学校によって大きく異なる。このような学校を運営に関する仕事は、教育実習や非常勤講師時代には直接的に関わることがないだけに、ボールに包まれ、なかなか見えて来ない部分である。また、校務分掌で行うような仕事については、大学の教職課程でも深く学ぶことはあまりない。このようなことから、私たちは、はじめは右も左もわからず、先輩教員に仕事内容を確認し、手探りでそれぞれの校務分掌の仕事をこなす毎日が続いた。公立学校は多くの初任者に対する研修時間を設

けている。しかし、前述したように校務分掌の組織の仕方などは、学校によって全く異なるため、自治体全体の教員を対象にした研修ではあまり学校運営の方法など校務分掌に関わる内容は扱われることがなかった。したがって、このような校務分掌の仕事に関しては、各学校での小規模な研修や実践しながら学んでいくことになる。このように、正規教員になるまではあまり教員の仕事として認識する機会が少なかった校務分掌の仕事であるが、学校によっては、校務分掌の仕事量が非常に多い。私たちの中でもこのような学校に配属しているものは、校務分掌に終われ、授業の準備時間の確保に四苦八苦することも多かった。しながらも時間を掛け徐々に要領を得ながら仕事を覚えていった。

私たちは正規教員となりそれぞれ部活動の顧問になっている。非常勤講師時代から顧問を持ったり、顧問の手伝いをしたりしていたが、正規の教員になるとその責任が変わってくる。運動部の顧問は、土日や祝日も試合の引率や練習などに率先して参加することになる。部活動から垣間見える生徒のひたむきさや成長は、教員にとってうれしいひとときである。しかし、部活動に費やす時間が大きく自分だけの時間が取りにくくなっていくのも事実である。言うまでもなく最低限の自分の時間の確保は人間に必要である。そのため、たまに得られる自分だけの時間は自分の好きなことに目一杯使い、リフレッシュするようにしている。私たちは、このような気分転換によっても気持ちを前向きに保ってきた。教員が気持ちを前向きに持ち教壇に立つことは、生徒に対しても明るく元気に接することができる。また、このようなリフレッシュの一環で得た知識や経験は、自分の財産になるとともに、生徒の知識を深めたり、課題解決したりするきっかけとなることもある。

せっかく教職に就けたのにも関わらず一年未満という短期間で教職を去っていったいく人がある現実を私たちの4人すべてが経験して来た。私たちも前述したような壁にそれぞれ道を塞がれ、とても辛いこともあった。しかし、このような中でも、私たちが教員を続けてこられたのは、生徒の笑顔、これにつきと思う。また、明治大学教育会での発表の機会を与えていただき、多くの教員の先輩方や後輩の大学生と出会うことが出来たり、原稿執筆させていただいたりする機会も私たちが教職に就いたからこそである。教員は苦しいことがあっても人の出会い笑顔に触れることができる。私たちは、経験不足であり、授業力、指導力などベテラン教員に比べまだまだ至らないことが多いが、これからも研鑽を積んでいく気持ちを忘れずに一人でも多くの生徒の笑顔に触れることが出来たらと思っている。